

Title	『こまの物語』の生成：『うつほ物語』享受の様相
Sub Title	The creation of The tale of Komano
Author	高橋, 諒(Takahashi, Ryō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2016
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.110, (2016. 6) ,p.25 (246)- 44 (227)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	冊子には前からの通しページあり
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01100001-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『こまの物語』の生成

— 『うつほ物語』 享受の二様相

高橋 諒

はじめに

『こまの物語』と題された写本がある。内容は、『うつほ物語』吹上上巻にあたるが、『こまの物語』という題は、散佚物語のそれを想起させる¹。中村忠行は、「宇津保の伝本中には「栄華物語」・「続うつほ」・「桂中納言」等、他の書名を冠するものがある²。」としており、『こまの物語』もその一つと目される。既に猪川優子が広島大学蔵『こまの物語』に関して、紹介を行っているが、他の諸本との関係や詳細な本文の検討はなされていないのが実状である。

本稿は、『こまの物語』を、『うつほ物語』吹上上巻の一伝本として再検証し、この物語がどのように生成されたのかを明らかにすることを目的とする。

一、問題の所在

猪川による『こまの物語』の紹介は、近世期における『うつほ物語』の伝流過程を考える上で一つの示唆を与えるもの

である。ただし、指摘には、数点の疑問が残る。

一つめは、『こまの物語』の伝本がどれほど現存しているのか、という点である。広島大学図書館蔵本以外の伝本も調査し、諸本間における差異を詳しく見ていく必要があるだろう。

二つめは、『うつほ物語』の伝本中、『こまの物語』のどの本文系統に属するか、という点である。『うつほ物語』の諸本は、前田本・浜田本・木曾本・流布本の四系統に区分される。そのうち、現在、最善本として位置づけられるのが、尊経閣文庫蔵前田家一三行本（通称、前田本）である。この前田本の箱書には、「宇津保物語／慶安四年七月／後水尾天皇所／賜我／黄門利常卿也遂以為家珍焉／正四位下行左近衛中将兼加賀守菅原朝臣／綱紀再拜頓首誌之」と、慶安四（一六五二）年に後水尾天皇が下賜したことが見える。この箱書から、古態をとどめるものとして位置づけられ、現行の注釈書や論考の大半が、前田本に依拠する。しかし、猪川の指摘するように、『こまの物語』は、前田本の本文とは異なる本文を複数有している。いかなる本文を持つのか再検証する必要があるだろう。

三つめは、『こまの物語』がどのように生成されたのか、という点である。猪川は、

散佚物語の名を連想させる思わせぶりの題をつけ、跋文では古物語の同名書と異なると断りながら、『うつほ』の名を挙げることなく源氏以前の物語であると位置付ける、ここには何らかの作為を感じざるを得ない。

と述べており、『うつほ物語』の名を示さず、『こまの物語』という別物語として仕立てた「作為」を指摘している。ただし、編者の「作為」と断ぜられるか、検討が必要である。また、さらにそれを書写した者（読者）はどのような認識で『こまの物語』を捉えたのか、も考える必要があるだろう。

本稿では、一つめ、二つめの疑問を解消させつつ、三つめの問題を中心に考えていくことにしたい。

二、『こまの物語』の諸本と本文

『こまの物語』の写本は、現在まで調査した限りで三本ある。これらの略書誌を記す。ゴチック体の「」内は略称で

ある。

(1) 広島大学中央図書館蔵写本 (広大本)

〔江戸中期〕写。縦二七・〇×横一九・四浬。袋綴、一巻一冊。料紙は楮紙。灰色表紙、表紙中央直書「こまの、物語全」とある。墨付全四一丁。内題は「こまの、物語」。本文一二行書、一行三二字程度。字面高さは、二〇・五浬。和歌は三〜四字下げで始まり、一首二行で、二行目は一行目より一字下げで、歌末は、地の文に繋がらない形式。尾題は、「こまの、ものかたり 終」。奥書は、なし。跋文は、「清の納言枕草紙物語はこまの、物語はふる／きかはほりさし出てもいにかおかしきなりといへり今この事此物語に見えず可尋／源氏蛩巻にこまの、ものかたりの絵にてある／をいとよくかきたる絵かなとて御らんすちいさき／女君の何心なくてひるねし給へる所をむかしの／有様おほし〇て女君は見給ふか、るわらはとちた／いかにされたりけんまるこわなをためしにしつ／へし心のとけさは人に似さりけれときて出給へりと／云々此事もこのものかたりに出すされはこの物語／は昔のこまの、物語はあらさるか此もの語にこまの／たね姿といふ事はかりにて狛野といふ事な／ければこれはこま物語などいひてこまの、ものかたり／と云は各別のものかなか／後の偽事とは／見えず源氏以前のものかたりと見ゆれば是も一／種の物語と心うへし」。印記は、前見返し中央に、「国語国文学教室」(青)、前見返し中央に、「広島／大学図／書印」(朱陽方)、前見返し中央やや下に、「広島大学／文／18129／図書」(青円)、一丁オモテ右肩に、「広島大学図書之印」(陽朱楯円)、一丁オモテ右下に、「城戸蔵」。

後述する(2)・(3)と異なり、上・中・下の尾題こそないが、二箇所半丁分の空白を設けることで、本文を三つに区分けしている。その箇所は(2)・(3)と一致する。

(2) 鶴舞中央図書館河村文庫蔵写本 (鶴舞甲本)

安永九(一七八〇)年写。縦二七・〇×横一九・二浬。袋綴、三巻一冊。料紙は楮紙。薄緑色横刷毛目表紙、表紙左肩双杵書題簽「狛野物語 全」(一七・二×三・八浬)とある。内題は「狛野物語」。上一四丁、中一三丁、下一二丁、墨付全三九丁(うち遊紙一丁)。本文一〇行書、一行三二字程度。匡郭は、一二・二×横一五・二浬。和歌は三〜四字下げで始

まり、一首一行で、歌末は、地の文に繋がらない形式。尾題は、「こまの、物語上(中・下)」。奥書は「慶安五年十月十一日以異本校定／(一〇文字分空白) 書殿正字藤原朝臣^兼／安永九年十二月八日書写竣功／(一〇文字分空白) 詞苑逸士藤益根識」。印記は、一丁オモテ右下に、「市立／名古屋／図書館／蔵書之」(朱陽方)、裏見返し中央に、「市立名古屋図書館／1926／大正12年7月15日」(茶田)。元奥書とおぼしい「慶安五年〜藤原朝臣」は、未詳である。

(3) 鶴舞中央図書館河村文庫蔵写本(鶴舞乙本)

〔江戸中期〕写。縦二六・二×横一九・一糎。袋綴、三卷一冊。料紙は楮紙。茶色横刷毛目表紙、表紙中央直書「こまの、物語^{中下}」とある。また後補で、表紙左肩双杵書題簽「こまの、物語 全」(一七・二糎×四・三糎)がある。内題は「こまの、物語」。上一五丁、中一四丁、下一二丁、墨付全四一丁。本文一二行書、一行二二字程度。字面高さは、二〇・三糎。和歌は三〜四字下げで始まり、一首二行で、二行目は一行目より一字下げ、歌末は、地の文に繋がらない形式。尾題は、「こまの、物語上(中・下)」。奥書は、なし。印記は、一丁オモテやや右下に、「市立／名古屋／図書館／蔵書之」(朱陽方)、一丁オモテ右下に、「河邨／家蔵」(朱陽方)、四二丁ウラ左下に、「市立名古屋図書館／0 4629／大正11年12月1日」(茶田)。

(1) (3)の諸本は、内容上三つに区切られている。一つめは、「むかし紀伊国むろの郡に」から始まり、源涼の登場と、仲頼・仲忠ら一行が吹上の宮を訪れ、歓待を受けるくだりまで、二つめは、「かゝる程に浜のほとりの花さかりになりぬ」から始まり、林の院での花の宴、種松の贈り物、種松の居住場所の説明まで、三つめは「かくて吹上の宮には」から始まり、鷹狩りと、仲頼の参内まで、である。三分割の分量は、ほぼ同じである。従って、『こまの物語』祖本は、薄めの列帖装で三冊本であった可能性がある。三冊に分けた理由は、編者が『こまの物語』を散佚物語であるように見せた「作為」として考えられる。この点は、第四節で後述する。

『こまの物語』諸本の本文は、いずれも『うつほ物語』吹上上巻の本文系統中、木曾本系統に合致する。木曾本系統

は、中村忠行が系統として立てて以降、現在まであまり言及されることのない本文系統であった。「木曾本」という呼称について、新美哲彦は「近世につくられた校本の校異に木曾本との記載が見えるのでそこからの命名かと思われる」と述べるが、詳しいことは定かではない。木曾本系統について明らかとなっているのは、木曾本系統の本文を持つ『うつほ物語』の断簡から、近世前期の三条西家周辺が書写に関わっていたこと、そして、木曾本系統の主な特徴として、諸本すべてに注記、振り仮名、宛字、読点が付され、校訂作業を経た本文であること、である。

『こまの物語』の諸本は、本文が木曾本系統であることに加えて、木曾本系統に見られる書人も有している。

また、『こまの物語』諸本間では、目立った異同が僅少である。ただし、目移りによる脱文とおぼしい事象から、『鶴舞甲・乙本』と『広大本』の間には、少し隔たりのあることが窺える。次のような例がある。

給なり□男は七郎にあたり給ふ侍従女の中には九

にあたり給ふなむいとこよなく物し給ふかの女君

をは只今の天下の人え聞過し給ははこれかれ

(広大本／一二ウ)

広大本には、私に空格の四角囲みを付した。その空格には、鶴舞甲・乙本ともに傍線の本文を有している。

給也男女なと人にこよなくまさりた

まへり其中にも男は七郎にあたり給ふ侍従女の中には

九にあたり給ふなむいとこよなく物し給ふかの女君をは只今の天

下の人え過し給ははこれかれ

(鶴舞甲本／一二ウ／一三オ)

給なり

男女なと人にこよなくまさりたまへり其中にも

男は七郎にあたり給ふ侍従女の中には九にあたり

給ふなむいとこよなく物し給ふかの女君をは只今の天

下の人え過し給はずこれかれ

(鶴舞乙本／一三オ～一三ウ)

広大本に、このような脱落が起きた可能性は四つある。次の通りである。

(ア) 広大本の書写者が、親本の本文を写す過程で目移りを起こした。

(イ) ある時点で目移りを起こした本を、広大本が親本として写した。

(ウ) 広大本の書写者が、意図的に本文を取り除いた。

(エ) ある時点で、意図的に本文を取り除かれた本を、広大本が親本として写した。

『うつほ物語』の木曾本系統は、右の傍線部分を有しているため、(ウ)・(エ)である可能性はないだろう。従って、『こまの物語』の祖本は、鶴舞甲・乙本のごとき本文を有していたと考えられる。とすれば、(ア)・(イ)のどちらかであるが、どちらか一方には判断しがたい。親本が鶴舞乙本のような本文の様態であれば、目移りによる脱文が想定できるだろう。少なくとも、書写者による目移りと見てよさそうである。この点を踏まえると、『うつほ物語』木曾本系統の伝本を用いて、『こまの物語』が作られ、その祖本から派生して『鶴舞甲・乙本』や、前述の脱文を起こした『広大本』が出来た、と想定できる。脱文箇所を見る限りでは、『鶴舞甲・乙本』の方が、祖本の本文を正しく伝えている。なお、鶴舞甲本では、「それにそひ／＼紅梅なみたちたりそれにそひてつゝ、しの木とも」(四オ)と、傍線が目移りにより脱落する。鶴舞乙本の方がより正しい本文である。

なお、鶴舞中央図書館河村文庫蔵写本のうち、『こまの物語』と同色の表紙・造りのものがあれば、より正確な書写年や、どのような写本とともに書写されたものか、判明する可能性がある。現時点では、そこまでの調査は行っておらず、定かではない。

次節以降では、以上の諸本の本文や書入を踏まえながら、『こまの物語』がどのように生成されたものであるか、述べていきたい。

三、なぜ『うつほ物語』吹上上巻を選んだか

『こまのの物語』は、『うつほ物語』の吹上上巻を、別物語のように仕立てたものである。三つの疑問が浮かぶ。一つめは、編者はなぜ吹上上巻を選んだのか、という点である。二つめは、別物語にするとき、編者はなぜ『うつほ物語』を選んだのか、という点である。三つめは、編者はなぜ別物語に仕立てたのか、という点である。

まず、『うつほ物語』のうち、編者はなぜ吹上上巻を選んだのか。この点を考えていきたい。『こまのの物語』の冒頭本文は、次のようにある。

むかし紀伊国むろの郡にこまのたね松といふ長者かきりなききよらの王^主にてた、今国のまつりこと人にてかたちきよけにてこ、ろつきてありそれか妻にては源のつねありと申ける大納言のむすめよきむことり^良なりと^取しけるをほともおやもをとこも^夫うしなひて世中に住わすらひたるをたね松たはかりとりて其はらによきむすめ一人ありければ内の藏人つかふまつりけるかはらにけんしひと所むまれ給ひけり母うみ置てかくれぬ御門しろしめさず母そ^奏うせずなりにけりか、れどおほちうはこふをり吹上の浜のわたりに広くおもしろき所^撰をえらひもとめて金銀^{瑠璃}りの大殿をつくりみかき

(鶴舞乙本／一才)

掲出した本文は鶴舞乙本であるが、『こまのの物語』諸本はすべて同様の冒頭本文を有する。傍線を付した箇所が、『うつほ物語』諸本では、すべて「かくて」「かなひのたねまつ」とあり、『こまのの物語』では、それぞれ改変されていることが分かる。

改変の理由としては、物語の題名である「こまの」に対応させる形で、「かなひのたねまつ」を「こまののたねまつ」とした、と考えられる。ただし、改変がなされているのは、冒頭本文のみで、以降の本文では、『うつほ物語』諸本と同様に、「かなひ」とする。必ずしも「こまの」という名を徹底させているわけではない。また、冒頭本文は、「こまのたねまつ」である。宛字に「狛」とあるから、「こま」が氏で、「たねまつ」が名である。つまり、『こまのの物語』の「こまの」

とは異なる。この点は、広大本の跋文においても、¹¹⁾

此もの語に、「こまのたね忝」といふ事ばかりにて、「狛野」といふ事なければ、これは『こま物語』などいひて、『こまの、ものがたり』と云は、各別のものか。

という趣旨の指摘がなされている。

ここで、『うつほ物語』吹上上巻の物語内容を確認しておこう。

吹上上巻は、仲頼・仲忠ら一行が、紀伊国の吹上の宮を訪問し過ぎした、三月から四月までの出来事を語る。吹上は、熊野も含む牟婁郡という信仰地域の中にある。¹²⁾ そうした地を仲頼・仲忠らが訪れ滞在する。吹上の宮を訪れるくんだり、仲頼の部下にあたる松方は、「つかさの源少将（＝仲頼）、こかはにまうで給へるともになん候つる」と、粉河寺の参詣のついでに訪れたことを述べている。少し時代は下るが、『いほぬし』『熊野紀行¹³⁾』において、

紀の国の吹上の浜に泊まれる、月いとおもしろし。この浜は、「天人常に降りて遊ぶ」といひ伝へたる所なり。げにそもいとおもしろし。
(三七～三八頁)

とあるように、熊野山へ向かう道中、ここを訪れている。吹上は、そうした熊野の信仰地域に属することが窺える。

こうした物語内容を踏まえると、『こまの物語』冒頭の「こまの」とは、「くまの」を意味していたのではないかと推察される。

平安期の作品に例を見ると、『枕草子』「物語は」の段では、

物語は、住吉。宇津保、殿移り。国譲りは憎し。∴『狛野の物語』は、古蝙蝠探し出でて持ていきしが、をかききなり。
(下・一〇六～一〇七頁)

とあり、印象に残った箇所が述べられている。「成信の中将は」の段でも、

『狛野の物語』はなにはかりをかききこともなく、言葉も古めき、見どころ多からぬも、月に昔を思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠取り出でて、「もと見し駒に」といひて、訪ねたるが、あはれなるなり。
(下・二二三～二二四頁)

と、『こまの物語』の評価を下している。両段は、諸本間でも異同はなく、「こまの、物語」とある。また、『源氏物語』¹⁴ 蜚巻に、『くまの物語』なる散佚物語が見える。

紫の上も、姫君の御あつらへにことづけて、物語は捨てがたくおぼしたり。『くまの物語』の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧す。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへるところを、昔のありさま申し出でて、女君（＝紫上）は見たまふ。

(④七七頁)

おそらく『くまの物語』は、『源氏物語』以前には存在した作り物語であろう。『源氏物語』諸本間での異同を見るに、河内本は高松宮本以外すべて、別本は陽明文庫本を含む二本とも、「こまの物語」とするのに対し、青表紙本の本文では肖柏本以外すべて「くまの物語」とする。河内本及び別本の多くが「こまの物語」とすることから、「くまの物語」と「こまの物語」は同一の物語であったと見てよいだろう。「く」と「こ」は、転訛しやすい。とすれば、『こまの物語』の編者にとっては、「くまの」と「こまの」とは同一であった、と考えられる。すなわち、『こまの物語』の編者は、「熊野という地域を舞台にした物語」ということで、『うつほ物語』の吹上上巻に、この題名を与えたのではないだろうか。

ところで、『うつほ物語』は成立上の問題が多くあり、論議されてきた。他の作り物語と異なり、巻序を定めるのが難しいところがある。また、従来、『うつほ物語』の成立論議でなされてきたように、『うつほ物語』は巻ごとの独立性が高い。俊蔭・藤原の君・忠こそ・吹上上・内侍のかみ・楼の上上下下といった巻が該当するだろう。前の巻を必要とせず、新たな登場人物、新たな内容を有する巻は独立性が高いとして論じられてきた。吹上上巻は、源涼という新たな人物が登場し、その人物の住む吹上の宮に仲頼・仲忠ら一行が訪問し過す。つまり、新しい登場人物、新しい内容、物語の中心である京ではない地を訪れる形式、といった他巻を踏まえずに読める点から、吹上上巻が選ばれたと考えられる。

このように、独立性の高い巻を有するがゆえに、『うつほ物語』は、別物語として仕立てられることを許したと考えられる。このことは、『かやくき物語』の存在からも裏付けられる。『かやくき物語』は、『うつほ物語』楼の上上下巻にあたる。『こまの物語』のほかにも、『かやくき物語』や、中村の指摘¹⁵にある、「栄華物語」・「統うつほ」・「桂中納言」など、

別書名を冠する写本が存在することは、『うつほ物語』の巻における独立性の高さを示している。こうした例は、『源氏物語』や『栄花物語』など他の物語では確認できない。¹⁶

では、なぜ『うつほ物語』という既存の物語を別物語にする必要があったのだろうか。『こまの物語』の編者および書写者（読者）の認識を考えたい。

四、『こまの物語』編者の認識

編者はどのような認識で、『こまの物語』を制作したのであろうか。想定としては、次の二つになるだろう。

《X》 『うつほ物語』吹上上巻と認識して、「こまの物語」と題した。

《Y》 『うつほ物語』吹上上巻と分ならず、「こまの物語」と題した。

『こまの物語』の編者は、当該作品を『うつほ物語』と認識していたか否かが、ここで問われてくる。《X》の場合、また、次の二つの想定ができる。

《x1》 読者は『うつほ物語』と分ならず、散佚物語の『こまの物語』と驚くと予想して、制作した。

《x2》 識者は『うつほ物語』と分かるだろうと予想しつつ、制作した。

『うつほ物語』と認識していた場合、読者が『うつほ物語』と認識できる／できないことを編者が意識しながら、『こまの物語』という物語名を外題に書いた、ということになる。

一方で、『Y』の場合もあり得る。木曾本系統の外題は、「うつほ物語」とは記されず、巻名で記されている。仮に、『こまの物語』編者が、吹上上巻しか所持していなかった場合、『うつほ物語』とは認識できなかった可能性も残されている。この点を考えていく上で、『こまの物語』がどのような本文を有しているか、確認する必要がある。

『うつほ物語』木曾本系統の本文において、他系統の本文と顕著に異なるのは、書人や朱筆といった本文整定の痕跡が見えることである。殊に、朱引による抹消は、木曾本系統の諸本で共通して有するものである。この抹消を、『こまの物語』

ではどのように扱っているか見ていくことで、『こまの物語』編者の認識が《X》だったのか、《Y》だったのか、確定できるはずである。

まずは、木曾本系統の『うつほ物語』吹上上巻に見える、朱引の抹消箇所を以下に示す。

①のたけやきはかり年六はかりなるはしり四まき糸のくらはね（久曾神本／四九ウ）

②たまへりせきのもとまでこゝは吹上の宮衣かへしてなみぬたまへり馬とも引出こまあそひしてきたり鷹ともすへて鳥のまひしていできたり銀のはたこともはこにひとわれてあゆませて引出たりやり水に金の舟とも漕つらねて舟遊してみぞ櫃すはりのすりなどを前にとり出たりすき箱もこれは君たち直衣姿にて乗つらねて出立たまへりこゝは関のもと国のかんのぬしまう

（久曾神本／六四ウ〜六五オ）

③下人なれ子はゆふそくにいていとこゝろにくかりし物そともよわそきかさりつるいかや

（久曾神本／七一オ）

朱引箇所のうち、①は語義の分らない箇所、②は現行の注釈書で絵詞とされる箇所、③は文意不通の箇所である。

①〜③に対応する形で、『こまの物語』の当該箇所を掲出する。それぞれ①②③と示す。

①のたけやきはかり年六はかりなるはしり四まき糸のくらはね

（鶴舞乙本／二六オ）

②国のうちをこそりて見送りし給へりこゝは関のもと国のかんのぬしまうけし給へり君達に沈

（鶴舞乙本／三五オ）

③下人なれ子はゆふそくにいていとこ心にくかりし物そともきかさりつるいかや

（鶴舞乙本／三八オ）

対照させてみると判明することであるが、朱引に対する処理として、①は残し、②はほぼ取り除き、③は取り除いている。すなわち、『こまの物語』の本文は、『うつほ物語』の木曾本系統でありながら、朱引の抹消を残す箇所と、朱引に従い抹消して写さなかつた箇所とに分かれる。従って、『こまの物語』の編者が、必ずしも朱引の抹消には従っていなかつたことが知られる。

『こまの物語』の類例として、『かやくき物語』を参照してみる。¹⁷『かやくき物語』は、『うつほ物語』楼の上上下下巻にあたる。『うつほ物語』木曾本系統の、楼の上上下下巻では、朱引による抹消を四箇所有する。『かやくき物語』の場合、その朱

引による抹消をすべて取り除いた本文となっている。対して、『こまの物語』の場合、必ずしも朱引の抹消に忠実に従っているわけではない。むしろ、編者が朱引を吟味しつつ、本文の整定を行っていることが窺える。

このことを裏付ける例として、②と②がある。久曾神本では、「こ、はくたまへり」までが朱引の抹消箇所であるが、鶴舞乙本では、その朱引の抹消に加えて、「せきのもとまで」(四角囲み)まで取り除き、本文を整定している。『こまの物語』諸本は、共通してこの本文を有する。猪川は『こまの物語』が書写過程で起こした目移りと解するが、首肯しかねる。目移りならば、「たまへりせきのもと国のかんのぬし」のように、「せきのもと」という同語によって引き起こされるだろう。しかし、『こまの物語』では「こ、は関のもと」があり、『うつほ物語』四系統の諸本にある「せきのもとまで」がないため、目移りとは解しがたい。つまり、ここは意図的に本文を改めたと考えられる。

前節でも示したように、『こまの物語』は、冒頭本文を改変している。それは、偶発的に行われたことではない。②と②の例と併せて、編者の意図を読み取れよう。また、①や③の本文も、現存する『うつほ物語』諸本には、見られない独自異文である。従って、『こまの物語』を仕立てるために、編者は、『うつほ物語』本文を意図して変えたと言える。仮に、『Y』の場合、このように本文を改変する積極的理由がない。どの物語か分からない状況では、内容から予想されうる物語の題名を付すだけであろう。あえて本文を吟味して改める行為から、

《X》『うつほ物語』吹上上巻と認識して、「こまの物語」と題した。
と推定できる。

例えば、『こまの物語』祖本が、鳥の子・列帖装の嫁入本であった場合、編者は、大名家の姫君などに、『源氏物語』以外の貴重な物語として進呈したことになる。このとき、第一読者である大名家の姫君などは、『うつほ物語』とは分らず、散佚物語の『こまの物語』として認識する。

一方、『こまの物語』祖本が、楮紙・袋綴であった場合、周りに『こまの物語』を渡した際、識者は『うつほ物語』であると分かり、そうでない読者は、散佚物語の『こまの物語』であると認識するだろう。

『こまの物語』祖本が三冊本であったのは、散佚物語の『こまの物語』と思わせるために、冊数をそれらしく改めた、と言える。

このように、

《x1》 読者は『うつほ物語』と分からず、散佚物語の『こまの物語』と驚くと予想して、制作した。

《x2》 識者は『うつほ物語』と分かるだろうと予想しつつ、制作した。

の二つが、編者が制作する上での認識としてあった、と考えられる。『こまの物語』が散佚物語の名であるという点で、『かやくき物語』とは同様に扱えず、両方の状況があったと推断される。

五、『こまの物語』書写者の認識

一方、『こまの物語』を写した者たちは、どのような認識で、『こまの物語』を写したのであろうか。想定としては、次の二つになるだろう。

《P》 『うつほ物語』吹上上巻と認識した。

《Q》 『うつほ物語』吹上上巻と分ならず、散佚物語の『こまの物語』として認識した。

これを探るために、『こまの物語』諸本における書人に注目してみたい。

第二節で述べたように、注記、振り仮名、宛字、読点が付されている写本は、『うつほ物語』木曾本系統の大きな特徴である。そのほか朱引・合点が付されており、木曾本系統が校訂作業を経たとされる理由はこうした点にある。『こまの物語』が『うつほ物語』木曾本系統の本を用いて本文整理を行った点は、前節で述べてきたところである。では、木曾本系統特有の書入は、『こまの物語』では、どのように現れているのだろうか。試みに、【1】『こまの物語』諸本と【うつほ物語】木曾本系統の書人が一致する例、【2】『こまの物語』の一写本と、『うつほ物語』木曾本系統の書人が一致する例を、いくつか掲出する。掲出にあたり、『こまの物語』は、【1】を鶴舞乙本、【2】を広大本で示し、木曾本系統は、代

表して久曾神本で示した。

【1】『こまの物語』諸本と木曾本系統が共通して一致する例

《こまの物語》／《木曾本系統》

したむ・すはう・くろかい紫燉 蘆芳 黒柿（鶴舞乙本・一ウ）／久曾神本・三丁ウ

く薰衣香のえかう・さかう麝香など（鶴舞乙本・二五オ）／久曾神本・四八オ

し新羅らきくみ（鶴舞乙本・二九オ）／久曾神本・五五ウ

鞆シガヒかけて（鶴舞乙本・三〇オ）／久曾神本・五六ウ

そくさ栗散こく（鶴舞乙本・三九オ）／久曾神本・七二オ

【2】『こまの物語』の一写本と木曾本系統が共通して一致する例

《こまの物語》／《木曾本系統》

つるはみ檜（広大本・一六オ）／久曾神本・三一ウ

茵シトネ（広大本・二五オ）／久曾神本・四六ウ

尻鞆シザヤ（広大本・三〇オ）／久曾神本・五六ウ

これらの例から、『こまの物語』には、『うつほ物語』木曾本系統の書人と、おそらく書写者自身で付したと思われる書入との二つが混在していることが分かる。すなわち、『こまの物語』は、書人を取捨選択して撰取しているのである。このことは、木曾本系統の書人から撰取したものが、『こまの物語』諸本によつて異なる点からも、首肯できよう。

類例として、『かやくき物語』を参照してみる。『こまの物語』の場合、二種の書人は、どちらも墨書であった。『かやくき物語』の場合、木曾本系統から撰取した書人は墨書、『かやくき物語』の生成後に行った書人は朱書である。墨書は大半が宛字および振り仮名に対して、朱書の大半は異本注記であった。『こまの物語』と『かやくき物語』では、色分けの有無という違いはあるもの、木曾本系統から撰取した書人と、書写者自身が付した書人が、諸本で異なる点は同じである。

なお、『うつほ物語』木曾本系統の諸本には、荻野由之本、中村本、蓬左文庫本、久曾神本、岸本由豆流本、岡本文庫本の六本が確認される¹⁹。このうち、所在の不明である中村本、岸本由豆流本を除いた四本は、概ね書人が共通するが、異なる部分も含んでいる。『こまの物語』では、諸本によって、木曾本系統と共通する書人が異なる。従って、【1】・【2】のような書人の比較を逐一行うことで、『こまの物語』編者が、どのような『うつほ物語』写本を用いていたか、その推定を狭められるだろう²⁰。

さて、『こまの物語』の現存諸本のうち、広大本は、「城戸蔵」の蔵書印から、城戸千楯が書写・所持していたと目される。城戸千楯は、安永七（一七七八）年に生まれ、弘化二（一八四五）年に没した。寛政九（一七九七）年に本居宣長に入門し、家業の傍ら鐺廻舎を興して、国学を教授した。宣長の没後は、荒木田久老に学んだ。本居宣長の著作である『後撰集詞のつかね緒』の伝本のうち、国文学研究資料館の高乗勲文庫蔵写本（89―154）は同じ蔵書印を有する。従って、城戸千楯と判断される。千楯は、宣長の門下であるから、『うつほ物語』を知っていただろう。

また、鶴舞甲・乙本は、甲本の奥書から、河村益根が書写・所持していたことが分かる。河村益根は、河村秀根の二男で、宝暦六（一七五六）年に生まれ、文政二（一八一九）年に没した。家学の紀典学を学び、その後岡田新川に漢学を学んだ。詩歌を好み、書法や管楽にも通じた。河村益根の祖父にあたる河村秀頼は、二〇巻揃いの『うつほ物語』を所持していた。現在は鶴舞中央図書館の河村文庫（河ウ71〜202）に所蔵されている。孫の益根も、『うつほ物語』を読んだことはあっただろう。

両者は国学者であり、『うつほ物語』を所持していた、もしくは認識できた、と考えられる。従って、『P』、『うつほ物語』吹上上巻と認識した。

と推定される。『P』の場合、『こまの物語』は識者たちの間で行き来していたことが想定される。国学者たちの文化圏の中で、『こまの物語』が制作され、書写された可能性は高い。ゆえに、『うつほ物語』の一部を『こまの物語』という別の物語に仕立てた人物も、識者であると推察される。ただし、『こまの物語』祖本が嫁入本であった場合、大名家の姫君

などの第一読者は、『うつほ物語』吹上上巻とは認識できなかった可能性がある。

このように、『こまの物語』は、『X』—『x1』・『x2』—『P』の状況で生成・享受されたのである。そして、編者も書写者も、『うつほ物語』と認識しながら、『うつほ物語』の一卷に別の名を付して流布させることが、一つの享受のあり方であった、とも言える。

おわりに—近世期の『うつほ物語』享受

以上、『こまの物語』編者の認識及び書写者（読者）の認識をまとめると、次の通りであろう。

まず、編者は、『うつほ物語』吹上上巻と認識して、「こまの物語」と題した。その際、識者は『うつほ物語』と分かるだろう、と想定していた。対して、書写者（読者）は、『こまの物語』を、『うつほ物語』吹上上巻と認識して、書写した。要するに、編者と書写者（読者）は、『こまの物語』が『うつほ物語』であると互いに理解しながら、別物語として生成・享受したのである。ただし、大名家の姫君などの第一読者は、『うつほ物語』の一部とは分からなかった可能性がある。

このことは、鶴舞甲本に、河村益根の奥書があるように、『こまの物語』を国学者たちが所持していた点からも推断できる。つまり、書写者（読者）が国学者であれば、編者も自ずとその文化圏に属する人物である点を示唆する。

『かやくき物語』の場合、その書人が詳細で、木曾本系統から撰取した書人とそれ以外の書人とを、墨書・朱書で分けている点、朱書の異本注記が諸本間において異なる点、その異本注記が木曾本系統以外の本文系統を含む点から、編者が『うつほ物語』を知った上で別物語に仕立て、書写者も『うつほ物語』と分かった上で享受していた可能性がある。『かやくき物語』では、諸本の書写・所持者が国学者であったことは書誌から分ならず、可能性にとどめたが、『こまの物語』からその点は裏付けられたと言える。

従って、編者も書写者も、『うつほ物語』と認識しながら、『うつほ物語』の一卷に別の名を付して流布させることが、

『うつほ物語』における享受のあり方の一つであった、という点が指摘できよう。

では、こうした別物語の制作は、何を意味しているのだろうか。互いの知識を確認する一種の遊戯としての性質が考えられるだろう。また、近世期における擬古物語制作の一環として考えられるのではないか。荒木田麗女に代表されるように、近世期には擬古物語の創作が行われていた。²¹多くは、『源氏物語』や『うつほ物語』といった平安期の物語を、模したものである。本稿で述べてきたように、『うつほ物語』に付す外題は、平安期に成立したとされる散佚物語の名も含んでいる。そうした近世期には存せず、内容もほぼ分からない散佚物語を、既存の物語を利用して制作した可能性も指摘できよう。

本稿では、『うつほ物語』の或る巻を、別物語に仕立てる生成・享受のあり方を論じてきた。一方で、近世期には、『うつほ物語』の複数の巻から本文を抄出してまとめ、別物語に仕立てる生成・享受のあり方も存在する。²²この点に関しては、向後の課題としたい。

註

1 平安時代に存し、中世に散佚した『こまの物語』については、新美哲彦『光源氏物語抄』所引「こまの、ものがたり」について―散佚『こまの』・『交野の少将』・『隠れ蓑』との関係再考―（『国語と国文学』八〇―一〇、二〇〇三）参照。

2 中村忠行「宇津保物語に関する展覧書目録（附解説）」（『日本文学研究叢書 平安朝物語Ⅱ』有精堂、一九七四）参照。なお、伝本に関する詳細な解説は、以下を参照。

片寄正義「宇津保物語傳本考」（『国語国文』七一、一九三七）

笹淵友一「うつほ物語諸本解題」（西村宗一・笹淵友一編『校本うつほ物語 俊蔭卷』興文社、一九四〇）

吉田幸一「宇津保物語の諸本」（『宇津保物語新論』古典文庫、一九五八）

3 猪川優子「広島大学蔵『こまの物語』のまやかし―『うつほ物語』伝流過程における一様相―」（『古代中世国文学』一七、二

- (一) 参照。
- 4 『日本古典文学大辞典』の「うつつほ物語」の項において、執筆担当の野口元大が、同分類で四系統とする。
- 5 前田本については、注2前掲論文に加えて、以下を参照。
- 6 笹淵友一「前田本宇津保物語解説」(『宇津保物語』一) 古典文庫、一九五七)
- 7 中村忠行「前田家十三行本『宇津保物語』その他」(『宇津保物語研究会会報』二、一九六九)
- 8 a 室城秀之「前田家本『うつつほ物語』はどのような本か」(『物語研究会会報』二八、一九九七)
- 9 b 同「『うつつほ物語』の注釈・本文」(『国文学』四三―二、一九九八)
- 10 注2の中村論文参照。
- 11 『うつつほ物語』の共通祖本及び位置関係に関しては、新美哲彦の一連の論稿がある。以下を参照。なお、a～cの論稿のうち、「木曾本」の呼称に言及したのは、aである。併せて、注2の吉田論文も参照。
- 12 a 新美哲彦「『うつつほ物語』の伝流―幽齋本・三条西家断簡から」(『平安朝文学研究』復刊九、二〇〇〇)
- 13 b 同「『うつつほ物語』共通祖本の特質」(『中古文学』六八、二〇〇二)
- 14 c 同「『うつつほ物語』の諸本―主要四系統の位置関係及び性格」(『国文学研究』一三七、二〇〇二)
- 15 注7の新美論文a参照。
- 16 注5の室城論文a、注7の新美論文a参照。
- 17 本稿で掲出する『うつつほ物語』及び『こまの物語』諸本の本文は、以下の原本・影印に拠る。()内は請求記号。
- 18 ○うつつほ物語
- 19 久曾神本…久曾神昇『俊景本宇津保物語と研究 資料篇第一～三卷』(ひたく書房、一九八三～一九八五)
- 20 ○こまの物語
- 21 広大本…広島大学中央図書館蔵写本(國文218G/N)
- 22 鶴舞甲本…鶴舞中央図書館河村文庫蔵写本(河F1/100)
- 23 鶴舞乙本…鶴舞中央図書館河村文庫蔵写本(河F1/101)
- 24 掲出した本文は、私に濁点・句読点・鍵括弧などを付した。
- 25 伊藤田豊「宇津保物語の地理的背景(吹上巻について)」(『平安朝文学研究』一二、一九六六)参照。

以下の引用は、『いほぬし』が増淵勝一『いほぬし精講』（国研出版、二〇〇二）、『枕草子』・『源氏物語』が新潮日本古典集成による。冊数・頁数も同様。引用した本文は、私に改めた箇所がある。

以下、諸本間の異同は、『枕草子』は、田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫、一九五三～一九六九）、『源氏物語』は、池田亀鑑『源氏物語大成』（普及版、中央公論社、一九八四～一九八五）による。

注2の中村論文参照。

ただし、平瀬本『源氏物語』の「竹河」巻が『狭衣物語』巻二だった、という例がある。豊島秀範「平瀬本「竹河」巻に混入した『狭衣物語』巻二本文の実態」（『国学院大学大学院紀要（文学研究科）』四〇、二〇〇九）参照。また、注1の新美論文では、『物語』の写本において、『石清水物語』の一系統が外題を『正三位物語』とする例、『吾の衣』巻三が『宇治大納言物語』として流布する例、『うつほ物語』が外題を『栄花物語』とする例など、外題や内題の誤記は数多くある」とするが、「誤記」と断ぜられるか、各個検討が必要であらう。

『かやくき物語』については、拙稿『かやくき物語』の生成―『うつほ物語』木曾本系統の伝流―（『三田國文』六〇、二〇一五）参照。以降、本稿における『かやくき物語』に関する言及は、拙稿による。

中島正二「物語たちの分類学」（『江戸文学』二二、二〇〇二）参照。擬古物語が嫁入本に用いられたのは、題名が和歌的で風雅であること、『伊勢物語』『源氏物語』のように一般に知られていないため、いかにも貴重な物語を進呈したと思わせる効果があったことを指摘する。それと同様に、『こまの物語』という散佚物語の名を冠することで、珍しい物語であると思わせる効果があった、と考えられる。

『うつほ物語』の諸本の呼称は、注2の中村論文に従った。それに示されていない伝本に限り、所蔵先を明記した。

ただし、可能性として、【3】『こまの物語』諸本と木曾本系統の一写本が共通して一致する例、【4】『こまの物語』一写本と木曾本系統の一写本が共通して一致する例、が考えられるが、確認される現存本で、そのような例はない。

中村忠行「荒木田麗女と『宇津保物語』」（『山辺道』一、一九五五）参照。

『うつほ物語』の複数の巻から和歌を抄出しまとめた『紀式部集』と題された写本と、複数の巻から本文を抄出しまとめた『和泉式部日記』と題された写本が現存する。各写本の本文は、以下を参照。

中西健治「紀式部集・本文」（『平安末期物語攷』勉誠出版、一九九七）

岡田貴憲・戸田瞳「天理図書館蔵『うつほ物語』（外題・内題『和泉式部日記』）解題・翻刻」（『古代中世文学論考』三〇、二〇一四）

【付記】

貴重な資料の利用に際して、広島大学中央図書館、鶴舞中央図書館より多大なるご高配を賜った。記して深謝申し上げます。